

# 依頼に対する「断り」の言語行動について

## —日本人と台湾人の大学生の比較—

施 信余

### キーワード

依頼に対する「断り」・言語行動・自然会話・電話会話・「断り談話」

### 1 はじめに

本研究では、日本人と台湾人による依頼に対する「断り」に焦点を当て、分析する。「断り」という言語行動は、相手の好意や依頼に対して「その意に沿えない」という気持ちを相手に理解してもらう行動であり、その行動自体が相手の心情を害し、人間関係を損なう危険性を伴うものである。したがって、「断り」を行う際、話し手は、「断り」を達成するほかに、人間関係を維持するために、相手に不快な思いをさせない配慮が必要であると言われてきた。

これまでの「断り」に関する先行研究は、主に調査紙を用いた談話完成テスト(Discourse Completion Test；以下、DCT)<sup>1</sup>やロールプレイなどの方法で調査されており、実際の会話における「断り」には焦点を当てていない。しかもこれらの研究は、断る側の一度の発話を分析対象としているものが多く、談話レベルにおける「断り」には注目していない。また、筆者が調べたところ、中国語における自然会話分析（特に台湾人<sup>2</sup>を対象としたもの）はまだほとんど行われていないため、台湾人の実際の言語行動の特徴を探ることは有意義な試みではないかと考えられる。

したがって、本研究は、日本人同士と台湾人同士の自然会話における依頼に対する「断り」を談話レベルから分析し、日本人と台湾人がどのように断りをしているのかを探り、その共通点と相違点を明らかにすることを目的としている。

### 2 本研究における「断り」行動の定義

本研究では、特に依頼に対する「断り」に絞り、また、「断り」を、「依頼を受けたあとから、その話題が終わるまでの、断る側がとる一連の言語行動」と定義する。これは、ただ「断り」を達成するために用いるストラテジーを指しているのではなく、依頼者との人間関係を維持するためにとる様々な言語行動も含んでいることを意味する。

### 3 調査方法—電話会話

#### 3.1 調査協力者

日本人と台湾人の各 52 名（依頼をする側 13 名、依頼をされる側 39 名）の計 104 名を調査協力者とした。日本人の調査協力者は日本に在住し、東京都内の大学に在籍する 18-23 歳の大学生または大学院生<sup>3</sup>で、台湾人の調査協力者は台湾に在住し、台北地区の大学に在学する 19-24 歳の大学生または大学院生で、全員女性である。

#### 3.2 調査手順

調査者が依頼をする側の調査協力者に、普段気軽にものを頼めるような、ある程度親しい同性の友人の中から学校の「先輩」・「同級生」・「後輩」<sup>4</sup>を一人ずつ選んでもらい、それぞれの相手に携帯電話から電話をかけて、あらかじめ決めた「依頼内容」に従って依頼をしてもらった<sup>5</sup>。

「依頼内容」は、「友人に、明日の午前中に自分の代わりに自分の男友達と一緒に国立国語研究所<sup>6</sup>に行き言語調査に関する実験に参加してもらうこと」に設定したが、その詳細な内容や会話の順序については、依頼をする側の調査協力者に任せることにした。実験を行った期間は、日本人の場合は 2003 年 7 月であり、台湾人の場合は 2003 年 8 月である。依頼をする側の調査協力者に静かな場所から、できるだけ相手とゆっくり話せる時間に実験を行ってもらい、日本人大学生同士と台湾人大学生同士の会話各 39 例を集めた。

会話内容のすべてをテープレコーダー、あるいはボイスレコーダーで録音した<sup>7</sup>。また、会話収録、依頼をされる側の調査協力者に実験だったことを告げて承諾を得た上で、調査協力者の双方にフォローアップ・アンケート<sup>8</sup>を記入してもらった。

### 4 分析方法

録音した計 170 分程度の会話を「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」（宇佐美 2003）に従って文字化する。

会話の文字化資料を定量的分析できるように、電話会話から「断り談話」を認定して、「断り談話」の構成要素を分類項目別にコーディングする。

コーディングの信頼性は、第一認定者と第二認定者（Second Coder）<sup>9</sup>の間の判定の一致率にて判断する。また、コーディングだけでは見逃しやすい会話の特徴は、文字化資料と二次的データであるフォローアップ・アンケートの回答から確認・検討し、分析結果に用いる。

#### 4.1 コーディング項目の定義

得られた会話の文字化資料を、以下のコーディング項目に従って分析を行う。

##### 4.1.1 電話会話における「断り談話」について

本研究は、ザトラウスキー（1993）の定義に従い、電話の呼び出し音が鳴ってから、二人の会話が終わって電話を切るまでの一連の会話を 1 単位の「電話会話」として考える。

また、電話会話において、依頼に関する最初の発話から、依頼内容に係る会話のやりとりが終わるまでを、一つの「断り談話」とする。以下に、「断り談話」の起点と終点にあたる『断り談話』のはじめとなる発話』及び『断り談話』のおわりとなる発話』について述べる。

「断り談話」のはじめとなる発話：

電話会話の開始部<sup>10</sup>が終わった直後に、依頼をする側の調査協力者による「注意喚起」「前置き」「見込みの確認」「先行する補助使用」<sup>11</sup>と「依頼発話」のうちのどれかが現れた場合、その最初に現れたものを「依頼に関する最初の発話」とする。そして、その「依頼に関する最初の発話」を、『断り談話』のはじめとなる発話』とする。

「断り談話」のおわりとなる発話：

依頼内容に係る会話のやりとりが終わった直後に、他の話題に替えて話す場合もあり、直接電話の終了部<sup>12</sup>に入る場合もある。ここでは、依頼内容に係る会話のやりとりが終わっていれば、「断り談話」が終わっていることとする。例えば、電話会話特有の会話のやりとり（「じゃ、またね。」「じゃ、失礼します。」など）は、「断り談話」から除外されることになる。しかし、電話の終了部で再び依頼内容に言及することがあり、これは南（1981）が「回帰」と呼んでいるものであるが、ここでは、その部分も「断り談話」の一部として考察する。

上述のように、電話会話から「断り談話」を認定し、さらに、一つの「断り談話」を、断りが成立するまでの流れと断りが成立した後の流れの二つの段階に分ける。一つ目は、依頼に関する最初の発話が現れたときから、最初の「断りへの了解を示す発話」が発せられたところまでの流れであり、二つ目は、最初の「断りへの了解を示す発話」が現れた直後から、「断り談話」が終わるまでの流れである。そこで、「断り談話」から最初の「断りへの了解を示す発話」の位置を確認する必要がある。以下に、「断りへの了解を示す発話」とは何かを定義しておく。

断りへの了解を示す発話：

国立国語研究所（1994）では、「相手が表明した断りの意思を受け入れること」を、「断りへの了解」とする。本研究は、基本的にこの定義に従い、「断りへの了解を示す発話」を、「相手の断りたい意志を認め、もうこれ以上ねばったりせめたりしないことを伝える発話」と定義する。すなわち、「断りへの了解を示す発話」が現れたら、断りが成立したことになる。

#### 4.1.2 「断り談話」の構成要素の分類法

本研究では、「断り談話」における「断る側」の言語行動を主な分析対象とする。4.1.1節で述べた方法で認定した各「断り談話」に対して、さらに本研究で提示した「断り談話」を構成する主要素に該当するものをコーディングしていく。本研究では、「単独的」なもの「複合的」なものをあわせて、11の「断り談話」の構成要素を設けた（【表1】を

参照)。以下に各構成要素の定義と実例を提示する。提示した例の中の下線を引いた部分がそれぞれの項目にあたるものである。

【表1】「断り談話」の構成要素

単独的	項目名	定義
一断る側の、話者交替するまでの一度の発話のうち、右記の構成要素が一つのみ含まれている場合	回避	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に伝えることを避けるために使うもの
	直接的な断り	相手の依頼に対して断りの意向を直接的に表現するもの
	理由説明	相手の依頼を断る理由について述べること
	代案提示	相手の依頼を断る代わりに、または相手の依頼を断った後に、問題になっている事柄について自分なりの解決策を提示すること
	謝罪や残念な気持ちの表明	相手の依頼を断ることにに対して詫びること、または自分が協力できないことにに対して残念な意を伝えること
	否定的な見解の表明	依頼内容について否定的な判断や意見を述べること
	条件提示	今の条件のままだと協力できないが、自分が提示した条件に替えてくれれば承知する可能性があることを伝えること

複合的	項目名
一断る側の、話者交替するまでの一度の発話のうち、二つ以上の単独的構成要素が含まれている場合	謝罪 + 理由説明 (または、理由説明 + 謝罪)
	謝罪 + 直接的な断り (または、直接的な断り + 謝罪)
	理由説明 + 直接的な断り (または、直接的な断り + 理由説明)
	その他の組み合わせ

【例1】<sup>13</sup> 回避—言葉を濁す

ライン番号	話者 <sup>14</sup>	発話内容
61	TBI06	嗯，嗯，那那那那你觉得你可以嗎？。 (うーん、うーん、じゃじゃじゃじゃ、行けると思う？。)
62	TYK06	嗯…〈笑〉。〔以傻笑來拖延時間的感覺〕 (えっとー〈笑い〉。〔笑いで時間を延ばしている感じ〕)
63	TYK06	<u>不知道耶〈邊說邊笑〉。</u> ( <u>分からなーい〈笑いながら〉。</u> )

## 【例2】回避—冗談を言う

49	JSK09	「JSK09 姓」さん (えっ) どうでしょう 〈笑う〉。
50	JSK09	<u>〈笑う〉「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」さん 眠いです 〈JBI09 がずっと笑っている。のち、2人で笑う〉。</u>

[例 3] 直接的な断り—協力に否定的な気持ちの表明

- 17 JBI04 「JSK04 名」空いてないかなと思って。  
 18 JSK04 空いてはいるけど行きたくない〈笑う〉。

[例 4] 直接的な断り—不可能 / 困難であることの表明

- 11 TBI07 明天早上 9 點。  
 (明日の朝 9 時。)  
 12 TBI07 〈是因為〉 { } { } **【】**。  
 (〈何故かというと〉 { } { } **【】**。)  
 13 TYK07 **【】** 〈我明天〉 { } { } 不行耶。  
(**【】** 〈私は明日〉 { } { } だめなんだけど。)

[例 5] 理由説明

- 21 JOK12 明日？。  
 22 JBI12 はい、明日の朝 9 時からで。  
 23 JOK12 明日ね、バイトなんだ。

[例 6] 代案提示

- 14 TBI09 你明天早上不行喔。  
 (明日の朝だめか。)  
 15 TOK09 還是，我幫你問看看，你要怎樣的，只要是女生就可以嗎？。  
(それとも、私が代わりに聞いてみようか、どんなのが必要なの？女の子だったら大丈夫なの？。)

[例 7] 謝罪や残念な気持ちの表明

- 38 JBI01 じゃ試験〈がんばって〉 { } { }。  
 39 JSK01 〈すみません、あの、〉 { } { } お役に立てなくて。

[例 8] 否定的な見解の表明

- 140 JBI03 なんかお礼ができないっていう…。  
 141 JOK03 あ、いやいや別に (んー)、それは。  
 142 JOK03 3 時間まずちょっときつい、きついかなー。

[例 9] 条件提示

- 45 TBI11 ha<sup>215</sup>, 你早上要上家教是不是？。  
 (あ、そう？、朝家庭教師があるの？。)  
 46 TYK11 嗯，我可能只有下午可以幫你。  
(うん。私はたぶん午後しか手伝えない。)

## [例 10] 「謝罪 + 理由説明」

- 16 JBI03 「教官姓」ゼミの関係でね、(うん) 明日ね、国立国語研究所に行く、行くはずだったんだけど、(うん) それにね、急に行けなくなっちゃってね、(うん) それでね、もし明日、の午前中に時間があつたら、行っていただけませんかという…。
- 17 JSK03 あ、ごめん、明日授業。

## [例 11] 「謝罪 + 直接的な断り」

- 145 JOK03 9時じゃね、ちよっ (うん-) なんか、うーん。
- 146 JOK03 /沈黙 7秒/うん-、ごめん、ちよっ <無理かも> {<}

## [例 12] 「理由説明 + 直接的な断り」

- 17 TBI14 是早上9點開始，然後要3個小時，可是沒有沒有錢。  
(朝9時から、それから3時間かかって、でも出ない、お金は出ない。)
- 18 TSK14 可是我明天有事情，可能不行耶。  
(でもわたしは明日用事があつたぶんだめなのよ。)

## [例 13] その他の組み合わせ—「理由説明 + 回避」

- 18 JBI01 ちよっと急ですよ。
- 19 JOK01 うん…、九時は多分遅刻するから、
- 20 JBI01 うん。
- 21 JOK01 <微妙…> {<}。

## [例 14] その他の組み合わせ—「否定的な見解の表明 + 直接的な断り」

- 52 TBI01 哪會很遠，在南港區耶，這麼近。  
(遠くないよ、南港区よ、とても近い。)
- 53 TOK01 而且我還要坐捷運去那麼麻煩，我不想。  
(しかも MRT で行かなきゃだめだから、そんなに面倒くさいことはしたくない。)

## 4.2 分析の信頼性

以上のようなコーディング項目に基づいた会話の分析、発話の分類の信頼性を確認するため、第二認定者を立て、複数の認定者の一致度と定義の明確性を見ることにする。文字化したすべての会話資料の8分の1を、筆者と第二認定者がそれぞれ個別にコーディングを行い、その判断の一致率をCohen's Kappa (Bakeman and Gottman 1986、以下、 $\kappa$ )を用いて確認する。西郡(2002)では、 $\kappa$ の値がどの程度高ければ信頼性が高いとみなしてよいかという点について、明確な基準はないものの、機械的な作業の要素が強い分類では0.85以上、調査者の判断が関わらざるを得ない性質が強いものは、0.7以上であれば一応の基準を満たしていると判断できると述べている。本研究におけるコーディング項目は、言語形式だけに頼るものでないため、0.7を基準とすることにした。【表2】に、本研

究の「断り談話」の認定及び「断り談話」の構成要素のコーディングに関する一致率を示す。

【表2】各コーディング項目の一致率

コーディング項目		Po	Pc	$\kappa$
「断り談話」の認定	日本人	0.993	0.913	0.914
	台湾人	0.983	0.919	0.794
「断り談話」の構成要素	日本人	1.000	0.648	1.000
	台湾人	0.959	0.701	0.864

\* Po：実際に観察された比率、Pc：偶然による比率、 $\kappa = (Po - Pc) / (1 - Pc)$

以上の結果から、本研究での日本人会話と台湾人会話における「断り談話」の認定及び「断り談話」の構成要素のコーディングは、信頼性を保っていることがわかる。

## 5 「断り談話」の構成要素の選択における日台の共通点と相違点

### 5.1 「断り談話」の構成要素における出現順序について

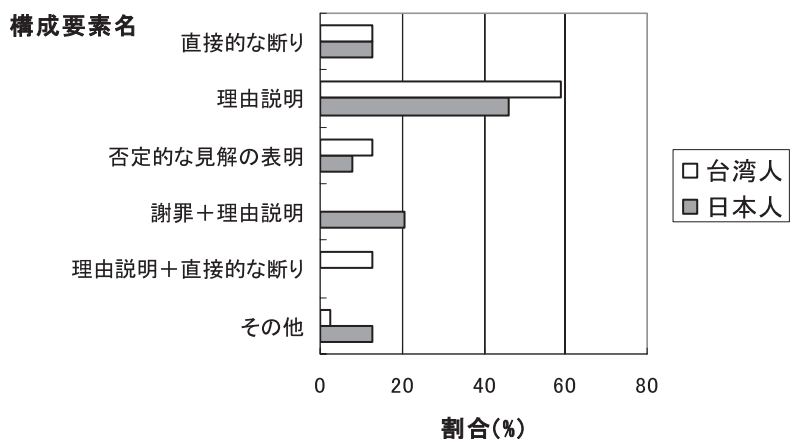
#### 5.1.1 最初に用いられる構成要素

まず、日本人と台湾人の各39の「断り談話」において、それぞれ「どの構成要素を優先させるか」を見てみる。ここでは、使用頻度上位五つの各「最初に用いられる構成要素」について、日本人と台湾人による使用頻度と日台の各総談話数に占める割合を【表3】に示す。その割合を図示したものが【図1】である。

【表3】日台の「最初に用いられる構成要素」における使用頻度とその割合

構成要素名	日本人		台湾人	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
直接的な断り	5	12.8	5	12.8
理由説明	18	46.2	23	59.0
否定的な見解の表明	3	7.7	5	12.8
謝罪 + 理由説明	8	20.5	0	0.0
理由説明 + 直接的な断り	0	0.0	5	12.8
その他*	5	12.9	1	2.6
合計	39	100.1	39	100.0

\* 上記の構成要素以外のものを指す（以下同様）。



【図1】日台の「最初に用いられる構成要素」における割合

【表4】と【図1】からわかるように、「最初に用いられる構成要素」において、日本人と台湾人ともに「理由説明」をたくさん使用している。しかし、日本人は「謝罪+理由説明」が2番目に多く使われているが、台湾人の「断り談話」では1例も見られなかった。一方、台湾人の「断り談話」では、「理由説明+直接的な断り」という構成要素が「直接的な断り」と「否定的な見解の表明」と同時に「理由説明」に次いで2番目に多く使われているが、日本人の「断り談話」にはなかった。

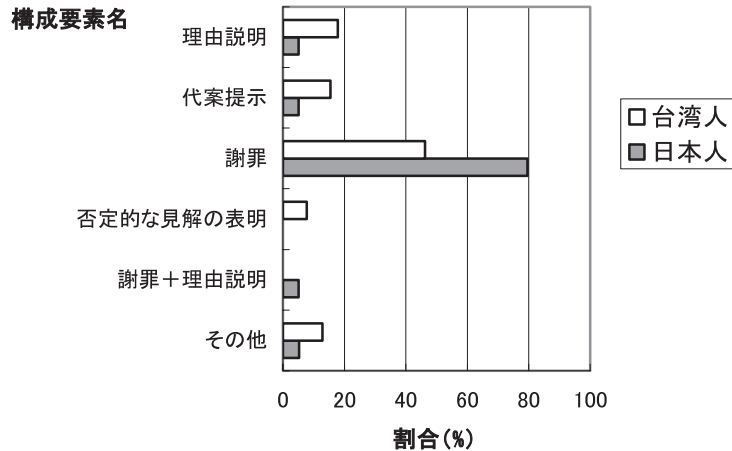
### 5.1.2 最後に用いられる構成要素

次に、日本人と台湾人の各39の「断り談話」において、それぞれ「どの構成要素を用いて談話を締めくくるか」を見てみる。ここでは、使用頻度上位五つの各「最後に用いられる構成要素」について、日本人と台湾人による使用頻度と日台の各総談話数に占める割合を【表4】に示す。その割合を図示したものが【図2】である。

【表4】日台の「最後に用いられる構成要素」における使用頻度とその割合

構成要素名	日本人		台湾人	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
理由説明	2	5.1	7	17.9
代案提示	2	5.1	6	15.4
謝罪	31	79.5	18	46.2
否定的な見解の表明	0	0.0	3	7.7
謝罪+理由説明	2	5.1	0	0.0
その他	2	5.2	5	12.8
合計	39	100.0	39	100.0





【図2】日台の「最後に用いられる構成要素」における割合

【表4】と【図2】からわかるように、「最後に用いられる構成要素」において、日本人と台湾人ともに「謝罪」をたくさん使用している。しかし、各構成要素が使用されている割合を詳しく見ると、日本人のほうがより「謝罪」の使用に集中する傾向がある（全日本人「断り談話」の約80%の割合を占める）。台湾人の「断り談話」では、「謝罪」を使用する割合は日本人ほどない（46.2%）が、そのかわりに「代案提示」も（15.4%）、「理由説明」（17.9%）も日本人より多く使われている。また、日本人の「断り談話」に見られた「謝罪+理由説明」（5.1%）の構成要素は台湾人の「断り談話」にはなく、一方、台湾人の「断り談話」に見られた「否定的な見解の表明」（7.7%）という構成要素は、日本人の「断り談話」においてそれを最後の構成要素として使う例はなかった。

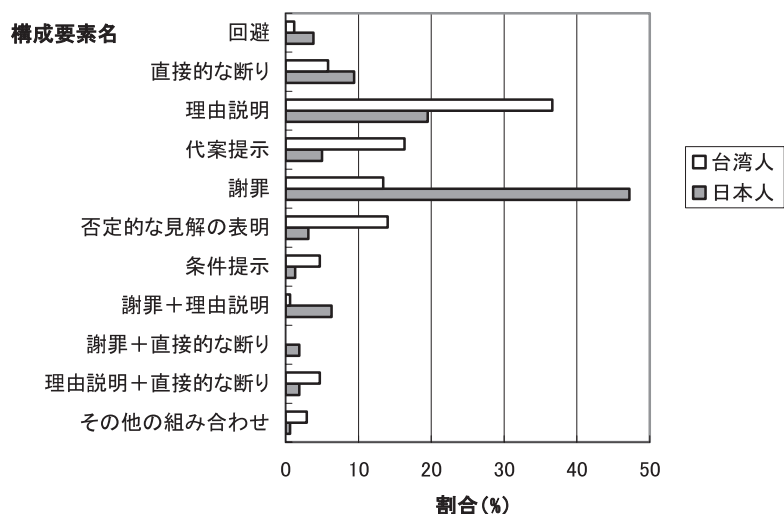
## 5.2 「断り談話」の構成要素における使用頻度について

### 5.2.1 「断り談話」全体における各構成要素の使用頻度と割合

ここでは、日本人と台湾人の「断り談話」における各構成要素の使用頻度と日台の各総使用頻度に占める割合を【表5】にまとめて提示する。その割合を図示したものが【図3】である。

【表5】日台の「断り談話」の構成要素における使用頻度と割合

構成要素名	日本人		台湾人	
	頻度	割合 (%)	頻度	割合 (%)
回避	6	3.8	2	1.2
直接的な断り	15	9.4	10	5.8
理由説明	31	19.5	63	36.6
代案提示	8	5.0	28	16.3
謝罪	75	47.2	23	13.4
否定的な見解の表明	5	3.1	24	14.0
条件提示	2	1.3	8	4.7
謝罪+理由説明	10	6.3	1	0.6
謝罪+直接的な断り	3	1.9	0	0.0
理由説明+直接的な断り	3	1.9	8	4.7
その他の組み合わせ	1	0.6	5	2.9
合計	159	100.0	172	100.0



【図3】日台の「断り談話」の構成要素における割合

【表5】と【図3】に示すように、台湾人の「断り談話」において、「理由説明」が一番多く使われており、その次は「代案提示」、「否定的な見解の表明」であるのに対し、日本人の「断り談話」において、「謝罪」の使用は他のどの要素よりも多くみられ、2番目に多いのは「理由説明」であり、その次は「直接的な断り」である。「回避」、「直接的な断り」、「謝罪」、「謝罪+理由説明」などの構成要素は、日本人のほうが多用しているが、「理由説明」、「代案提示」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「理由説明+直接的な断り」などの構成要素は、台湾人のほうがより多く使っている。

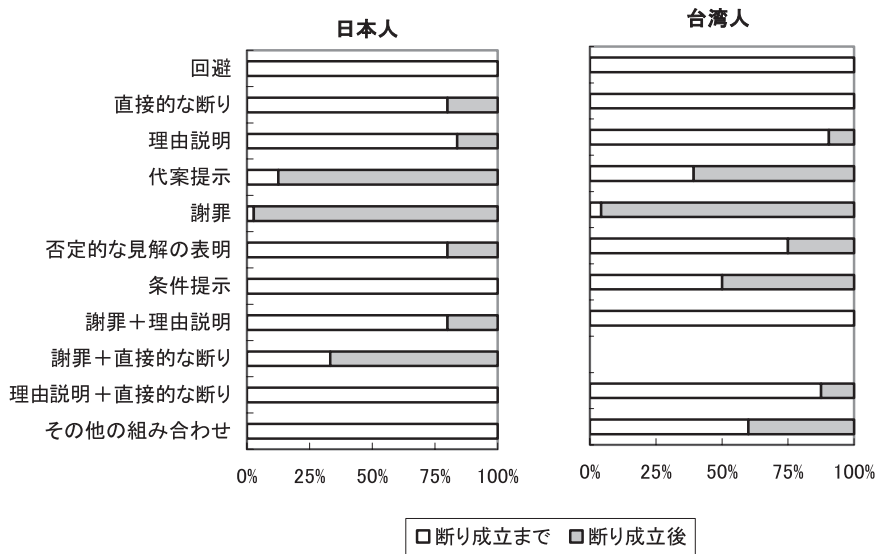
### 5.2.2 「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における各構成要素の使用割合

以下に、日本人と台湾人の「断り談話」における各構成要素の使用の割合を、「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階に分けて、【表6】にまとめて提示し、それを図示したものが【図4】である。

【表6】日台の「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における各構成要素の使用頻度の談話全体に占める割合 (%)

構成要素名	断り成立まで		断り成立後	
	日本人	台湾人	日本人	台湾人
回避	100.0	100.0	0.0	0.0
直接的な断り	80.0	100.0	20.0	0.0
理由説明	83.9	90.5	16.1	9.5
代案提示	12.5	39.3	87.5	60.7
謝罪	2.7	4.3	97.3	95.7
否定的な見解の表明	80.0	75.0	20.0	25.0
条件提示	100.0	50.0	0.0	50.0
謝罪+理由説明	80.0	100.0	20.0	0.0
謝罪+直接的な断り	33.3	—	66.7	—
理由説明+直接的な断り	100.0	87.5	0.0	12.5
その他の組み合わせ	100.0	60.0	0.0	40.0
合計	41.5	66.3	58.5	33.7

\* 台湾人の「断り談話」には「謝罪+直接的な断り」の使用がみられなかったため、「—」に記しておく。



【図4】日台の「断り成立まで」と「断り成立後」の2段階における各構成要素の使用頻度の談話全体に占める割合

【表6】からわかるように、「『断り成立まで』の段階で使われた構成要素の割合対『断り成立後』の段階で使われた構成要素の割合」について、日本人の場合は約「4割：6割」であるのに対して、台湾人の場合は「7割弱：3割強」で、使用された構成要素が「断りが成立するまで」の段階に集中して現れる傾向がみられた。

このように2つの段階に分けてみると、「断り成立まで」の段階において、日本人の場合は、「回避」をはじめ、「直接的な断り」、「理由説明」、「否定的な見解の表明」、「条件提示」、「理由説明+直接的な断り」、「その他の組み合わせ」などの構成要素の使用は、主にこの段階で行われており、台湾人の場合も、上述した構成要素のうち、「条件提示」と「その他の組み合わせ」を除けば、日本人とほぼ同じ特徴が見られている。また、「断り成立後」の段階において、日本人と台湾人ともに「謝罪」の使用がこの段階に集中していることが目立っている。そして、「代案提示」も、「断り成立まで」の段階より、「断り成立後」の段階で使われることが多いことがわかる。

以上の結果から、日本人と台湾人ともに、断りたい意思を伝える際に、主に「回避」、「直接的な断り」、「理由説明」、「否定的な見解の表明」などの構成要素を用い、また、相手が自分の断りに了解を示してくれた後に、「謝罪」をしたり、「代案提示」をしたりすることによって対人配慮行動をとることが多いといえるであろう。

## 6 「断り」を談話レベルで捉えることで明らかになる特徴

ここでは、対人コミュニケーションに関わる要素として「スピーチレベル・シフト」、「依頼側による『食い下がり』と『気配り発話』」、「話し手と聞き手との相互作用」を取り上げ、これらが「断り談話」の中でどのように働いているのかを考察する。

## 6.1 「スピーチレベル・シフト」

従来のポライトネス研究では、日本語のような敬意表現が文法の中に組み込まれている言語において、敬語の使用法が敬語使用の原則に制約されているため、戦略的な言語使用の余地があまりないと主張されてきた。しかし、日本語においては、談話レベルの要素、すなわち、スピーチレベル・シフトや話題導入の頻度などに顕著に個人の戦略的な言語使用が反映されていると考えられる（宇佐美 1993）。

例えば、以下の [例 15] と [例 16] の会話においてスピーチレベル・シフトが戦略的に用いられている。まず、[例 15] の会話において JOK06 のスピーチレベルの基本状態は「常体」だと考えられるが、ライン番号 46、48 の発話で JOK06 が「常体」から「丁寧体」へとアップ・シフトしている。また、[例 16] の会話では、同等の友人同士である JBI09 と JSK09 は、「常体」で話すのが普通だと思われるが、JSK09 がライン番号 50、53、55、57 の発話で「常体」から「丁寧体」へとアップ・シフトしている。そして、この会話では、依頼をする側の JBI09 からのアップ・シフトも見られた（ライン番号 35、49）。

## [例 15] 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例

- 42 JOK06 それはなにをするものなの？。
- 43 JBI06 なんか、私自し、体もちょっとよく分からないんですけど、〈なんか〉{《 》、
- 44 JOK06 〈《笑う》〉}、うん。[自分さえわからないことを他人に頼むのかよって感じ]
- 45 JBI06 その国立国語研究所の人が、(うん) なんか言葉、わ、若者言葉かなんかそういう言葉についての調査をするんで、(えー) それに参加してくださいっていうやつなんですけど。
- 46 JOK06 えー、うんーと、明日ねゼミの発表が、
- 47 JBI06 あっ。
- 48 JOK06 ありまして。
- 49 JBI06 はい。
- 50 JOK06 うんー、えっ、それは別にまさか「大学名」大でやるわけじゃないんだよね。
- 51 JBI06 あの、赤羽、らへん。

## [例 16] 「スピーチレベル・シフト」が含まれている例

- 34 JBI09 そう、でなんか急にいけれなくなってねなんか、(うん) そう、「JSK09 あだ名」明日、ね、どうかねって思って。
- 35 JBI09 どう、どうですかね。
- 36 JSK09 どこでやるの？。
- 37 JBI09 あ、すごい遠くて、(うん) えっとね、板、板橋。  
(中略)
- 49 JBI09 「JSK09 姓」さん (えっ) どうでしょう 〈笑う〉。
- 50 JSK09 〈笑う〉「JSK09 姓」さん、「JSK09 姓」さん眠いです 〈JBI09 がずっと笑っている。のち、2人で笑う〉。
- 51 JBI09 やー、9時起きれないか 〈笑いながら〉。

52	JBI09	〈9時は〉{  〈笑いながら〉。
53	JSK09	<u>〈起きれ〉</u> }  ないですよ。
54	JBI09	〈笑う〉しかも9時から。
55	JSK09	<u>明日はね</u> 、
56	JBI09	うん。
57	JSK09	<u>明日ね、あの一、マックを買いに行くんです。</u>
58	JBI09	〈笑いながら〉マック？。
59	JSK09	明日パソコンを買いに〈行くので、無理〉{ }。

このように、基本状態からはみ出しているスピーチレベル・シフトの使用は、ストラテジーとしての言語使用とみなすことができる。例えば、[例 15] のように、後輩の依頼に対して、断る理由を述べる場面において、依頼をする側の先輩である JOK06 は基本状態である「常体」から「丁寧体」へとスピーチレベルをシフトさせている。これは、相手のフェイス<sup>16</sup>を脅かす度合い、相手との対立を緩和するために用いられていると考えられる。

このように、敬語使用の原則がある日本語において、言語形式以外のスピーチレベル・シフトなどの言語的ストラテジーを用いて、相手に近づきたいという個人の気持ちを表したり、相手のポジティブ・フェイスに訴えかけたりしているのである（宇佐美 1998）。

## 6.2 依頼側による「食い下がり」と「気配り発話」<sup>17</sup>

自然会話データの分析結果が DCT による結果と根本的に異なる点は、自然会話では DCT には見られなかった依頼側による「食い下がり」や「気配り発話」が用いられているところである。つまり、自然会話では、[例 17] のように、JYK08 が依頼に対して「回避」という間接的なストラテジーを用いて断ったつもりであっても、JBI08 にそれが受け入れられず、依頼の場面がもう一度繰り返され、依頼の発話が続くことになる場合もあり、[例 18] のように、JBI01 が「無理ならいいんだけど」などのような「気配り発話」をしたため、JOK01 が断りをしやすくすることになる場合もある。

[例 17] 依頼側による「食い下がり」が含まれている例

7	JBI08	<u>「JYK08 あだ名」</u> 明日暇？。
8	JYK08	明日ですか？。
9	JBI08	うん。
10	JYK08	うん一、ちょっと微妙です。
11	JBI08	あ、微妙？。
12	JYK08	はい。
13	JBI08	<u>午前中も空いてない？。</u>
14	JYK08	はい。
15	JBI08	あ、そっか…。
16	JYK08	はい。

[例 18] 依頼側による「気配り発話」が含まれている例

- 11 JBI01 言語調査に関する実験に参加してはいただけませんか?〈軽く笑  
いながら〉。  
12 JOK01 えー、へー、へ、えー。[あまりに驚いた様子]  
13 JBI01 =しかも、韓国人と一緒に〈笑いながら〉。  
14 JOK01 えっ。  
15 JBI01 無理ならいいんだけど。  
16 JOK01 いやだ。  
17 JBI01 いやだ〈笑いながら〉〈二人で笑う〉。  
18 JBI01 ちょっと急ですよ。  
19 JOK01 うん…、九時は多分遅刻するから、  
20 JBI01 うん。  
21 JOK01 〈微妙…〉{|}。

このように、話し手は聞き手との相互作用の中で、ある特定の言語行動を徐々に「作り上げていく」ことが自然会話ではよくあることがわかった。

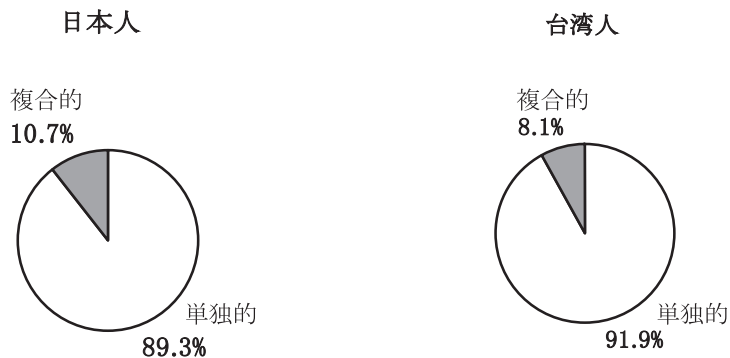
### 6.3 話し手と聞き手との相互作用

【表 1】に提示されている 11 の構成要素を「単独的」と「複合的」の 2 つのグループに分けてみると、その使用の割合は以下ようになる。

【表 7】「単独的」と「複合的」構成要素の使用割合の日台対照

単独的 / 複合的	日本人	台湾人
単独的	89.3	91.9
複合的	10.7	8.1
合計	100.0	100.0

以下の【図 5】に、日本人と台湾人における「単独的／複合的」構成要素の使用傾向を示す。



【図 5】「単独的」「複合的」構成要素における使用割合の日台対照

【図5】に示すように、自然会話における「断り談話」では、日本人と台湾人ともに「単独的」構成要素の使用は「複合的」構成要素より圧倒的に多いことがわかる。この点について、馬場・禹（1994）が提示した、「理由+謝罪」、「理由+代案提示」などの組み合わせた形で現れたものが日中両言語において多用されているという結果とは異なる傾向が示されている。これは、馬場・禹（1994）が用いたアンケート調査では依頼側との交渉行動がなく、普段何回かに分けてとる「断り」行動を解答欄にいつべんに書くことになりやすいため、複合的な構成要素が頻繁に使われる結果になると考えられる。それに対して、自然会話における「断り」の言語行動は一度の発話のやりとりで終わるのではなく、相手の反応を見ながら、相手との相互作用のなかで徐々に作り上げられていくのである。本研究で得られたこの結果は、このような自然会話の特徴を反映しているといえるであろう。

## 7 今後の課題

本研究では、主に言語行動の特徴に重点をおいたため、笑い、イントネーション、ポーズなどの音声的な側面は考慮に入れなかった。しかし、ためらいやポーズなどは、そのみで依頼側はこれから相手が断ろうとしていることが察知できる場合がある。今後、このような音声的な側面が「断り談話」においてどのように機能しているかについて分析を行いたい。

また、今後は、依頼側の「食い下がって依頼する」行動や「無理ならいいのよ」などの「気配り発話」がいかに断る側の行動に影響を与えるかについて考察を深めていきたい。

## 注

- 1 談話完成テスト（Discourse Completion Test: DCT）とは、被験者にあらかじめ設定された状況を与え、実際にその状況に置かれた場合、被験者ならどのように答えるかを、空欄に書いてもらうものである。
- 2 Liao（1994）は、中国語（Mandarin Chinese）は中国国内だけでなく、香港、シンガポール及び台湾でも一般に使われているが、地理上と政治上の違いにより、これらの四つの地域は、ポライトネスの社会語用論の面では独立して発達してきたと指摘している。
- 3 依頼をされる側の調査協力者のうち、日本人大学院生（1年生）と台湾人大学院生（1年生）がそれぞれ1名いる。その他の調査協力者は全員大学生である。
- 4 本稿では、「学年の差」による影響については言及しない。
- 5 この際、有効データは、依頼をされる側の調査協力者が依頼に対して断ったもののみとする。依頼が受け入れられた場合、相手を替えてやり直してもらう。
- 6 中国語の場合は、「国立国語研究所」の代わりに、「国立国語研究所」と性質的に似ていて（研究機関）、都心から少し離れている場所にある「中央研究院」にする。
- 7 携帯電話とテープレコーダー（またはボイスレコーダー）を接続し録音するためのアダプターを通して、調査協力者双方の発話を録音する。
- 8 フォローアップ・アンケートは、依頼をする側の調査協力者が記入するものと依頼をされる側の調査協力者が記入するものの2バージョンに分けて、相手との親しさや会話の自然さ、録音されていること、与えられた依頼内容についての質問、調査協力者の背景に関する質問を設けたものを使う。また、中国語のフォローアップ・アンケートは、日本語のものを筆者が中国語に訳して使用する。
- 9 第一認定者は筆者であるが、第二認定者は中村美保氏（日本人会話の部分）、謝韞氏（台湾人会



- 話の部分)である。
- <sup>10</sup> 電話会話の「開始部」は、「呼び出しに対する答え」、参加者の「自己提示」とその「了解」・「挨拶」からなる (Schegloff 1968)。
- <sup>11</sup> 謝 (2001) は、「依頼発話」には「依頼」行為の遂行動詞 (「貸す」、「借りる」) が伴う使用とそうでない使用があるため、対話者の発話を考慮に入れて「依頼発話」の認定を行っている。また、受信を促すものである「注意喚起」、会話の大まかな目的を伝えるものである「前置き」、「依頼」の続行の見込みや支障の有無を確認するものである「見込みの確認」と、聞き手にかける負担を実質的または心理的に軽減するための使用である「先行する補助使用」の四つを、「依頼発話」までの依頼側の会話展開に関わる項目として挙げている。
- <sup>12</sup> 電話の終了部には、「終了先行発話 (pre-closing)」 (例えば、英語の "Okay") や、「終了発話 (closing)」 (例えば、英語の "Bye") が含まれている (Schegloff and Sacks 1973)。
- <sup>13</sup> 本稿の談話例は、宇佐美 (2003) の書式を一部改変して示す。また、[例 2] 以下の談話例は、[例 1] と同様に、左側からライン番号、話者、発話内容を表す。
- <sup>14</sup> 話者 (調査協力者) を表す記号の説明は下記のようにである: J-日本人調査協力者、T-台湾人調査協力者、BI-依頼をする側の調査協力者、K-依頼をされる側 (断る側) の調査協力者、O-依頼をする側の先輩、S-依頼をする側の同級生、Y-依頼をする側の後輩。
- <sup>15</sup> 中国語の文字化において、漢字にできない感嘆詞は、ha2、ei4 などのように、もとの音声に一番近いローマゼンインにし、さらに声調がわかるように、1・2・3・4・0 と付けるようにする。
- <sup>16</sup> Brown and Levinson (1987) は、人間がもつ基本的な欲求として、フェイスの概念を提示している。フェイスには、他者に理解・共感されたいという欲求であるポジティブ・フェイスと、他者に邪魔されたくない、立ち入れたくないという欲求であるネガティブ・フェイスがあるとしている。
- <sup>17</sup> ザトラウスキー (1993) によると、「断りを促す発話」には、「断り / 断る理由に関する気配り発話」、「相づちによる気配り発話」、「接続表現による気配り発話」、「陳謝 / 感謝 / 残念な気持ちを表す発話」の 4 種類がある。「勧誘応答の話段」における「気配り発話」は、「断り」を促し、被勧誘者が断りやすくする発話であるという。

## 引用文献

- 馬場俊臣・禹永愛 (1994) 「日中両語の断り表現をめぐる」、『北海道教育大学紀要』第 45 巻第 1 号、43-54。
- Bakeman, R. & Gottman, J. M. (1986) *Observing Interaction: an Introduction to Sequential Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- J. V. ネウストプニー・宮崎里司編 (2002) 『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』、くろしお出版。
- 金秀英 (1998) 『日本語の話しことばにおける依頼に対する断り表現：韓国語との比較から』、平成 10 年度東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文。
- 国立国語研究所 (1994) 『伝えあう言葉 4 機能一覧表』、日本語教育映像教材 中級編 関連教材。
- Liao Chao-chih 1994. *A Study on the Strategies, Maxims, and Development of Refusal in Mandarin Chinese*. The Crane Publishing: Taipei.
- 劉玉琴、小野由美子 (1996) 「中日母語話者の『断り』発話行為に見られる相違について」、『中国国語学会教育研究紀要』第 42 巻第 2 部、540-545。
- 南不二男 (1981) 「日常会話の話題の推移—松江テキストを資料として」、藤原与一先生古希記念論集『方言学論叢』I、三省堂、87-112。
- 西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ『偶然の初対面』の公開—その方法論について—」、『人文学報』330、東京都立大学人文学部、1-18。
- Schegloff, Emanuel A. (1968) *Sequencing in conversational openings*. *American anthropologist* 70. 6:



1075-1095.

- and H. Sacks. (1973) *Opening up closing*. *Semiotica*, 7, 4: 289-327.
- 謝オン (2001) 「談話レベルからみた『依頼発話』の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から」、『東京外国語大学日本研究教育年報 5』、77-101.
- 施信余 (2004) 『談話レベルからみた依頼に対する「断り」の言語行動について—日本人大学生同士と台湾人大学生同士との比較—』、平成 15 年度東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文.
- (2004) 「電話会話における依頼に対する『断り』の日台対照」、早稲田大学日本語教育学会 2004 年秋季大会講演会・研究発表資料集、24-27.
- 宇佐美まゆみ (1993) 「談話レベルから見た“Politeness”—“Politeness Theory”の普遍理論確立のために」、『ことば』第 14 号、現代日本語研究会、20-29.
- (1998) 「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」、『日本語研究・教育年報 1997 年度版』、東京外国語大学日本課程編、145-159.
- (2003) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ)」、『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13-14 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (研究代表者：宇佐美まゆみ)、研究成果報告書、4-21.
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』、くろしお出版.